



アブラハムの3日間の旅路

Abraham's three-day journey

The Christian Science Journal, vol 126 number 4

クリスチャン・サイエンス・ジャーナルより転載 第126巻 第4号

Shirley Paulson / シャーリー・ポールソン

アブラハムは、何を考えていたのでしょうか?! 神に命じられて、モリヤの地に行くため、アブラハムは3日のあいだ歩きつづけました。アブラハムがその3日間に語ったこと、考えたことについて、聖書は、何の記録も残していません。創世記22章の物語から私たちが知り得ることは、アブラハムは、神に、愛する息子イサクを連れて行き、山頂で息子を燔祭として捧げなさい、と言われたということです。モリヤに到着したアブラハムは、息子イサクを縛って、燔祭として捧げる準備を整えました。ところが、そのとき、神の使いがアブラハムに、息子に手をかけてはならない、解いてやりなさい、「あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(創世22:12)と告げたのです。

幾世代にもわたって学者たちは、アブラハムの経験は、彼の神に対する深い信仰と服従を示すものであると教えてきました。しかし、最近になって一部の学者は、アブラハムは英雄などではなく、非情なる冷酷なる父親であって、これは、当時の残忍な暴力の水準を確認する例証であり、今日なら、とても受け入れられるものではない、と説いています。実際、現代の父親が、恐らく母親に相談もせず、子どもを連れ出して、神から特別の恩寵を受けるために、子を殺そうと計画するなどということは、合法的にできるはずがありません。それでも、家庭内暴力や、家庭崩

他の日本語記事については、次をご覧ください: <http://www.spirituality.com/christiansciencesakigake/index.jhtml>

© 2009 The Christian Science Publishing Society (CSPS). この記事は、50部までプリントアウトして、非営利として実費で提供することができます。この記事メール (email) で送ったり、ウェブサイトに載せたりすることはできません。代わりに、CSPSのウェブサイトに掲載されているこの記事へのリンクを、メールしたり、ウェブサイトに載せたりしてください。この記事の他の出版物に転載する許可を得るには、copyright@cspcs.com 宛に、メールをお送りください。件名は、英語で "Copyright Request" としてください。

壊に苦しむ犠牲者たちは、アブラハムが、息子を捧げよと聞かされた時と同様に、困惑し、神は自分たちをなぜ残酷に扱うのだろうかかと苦慮するかもしれません。しかし、聖書はまた、ある人々にとっては理解に苦しむ、このアブラハムとイサクの物語を霊的に解明してくれる、複数の鍵を与えています。これらの鍵は、アブラハムの、息子や妻に対する暴力的な、また利己主義的な側面を強調するものではなく、神の、アブラハムに対する、また彼の愛する息子に対する、愛を示すばかりではなく、全人類に対する神の愛と、神が彼らに与えた約束を守ったことを示すものなのです。例えば、神は、確かに、彼を「大いなる国民」としました、そして彼を祝福しました（創世 12:2）、また、イサクについては、アブラハムの子孫が空の星のように増すことの証拠として示されたのです（創世 15:5 参照）。アブラハムの霊的な旅路を垣間みることは、私たち自身の人生の旅路に光を当てることであり、心の痛手や家族の崩壊を癒す望みがあることを示すものです。

それから何世紀も経て、イエスの教えが、このアブラハムの物語に光を投げかけるのですが、それはイエスが「地上に平和をもたらすために来たのではなく、家族の中に剣を投げ込むために来たのである」（マタイ 10:34-36 参照）と述べた時のことです。先を読まないで、私たちは、アブラハムがそうしたのかと思われるように、イエスが暴力を肯定したと結論づけてしまうかもしれません。しかし、そのすぐ後で、イエスは「自分の命を得る」ことを望む人、言い換えれば、この世的な方法で平和を求める人は、命を失い、また神に従って神の国を求める人は、まず自らの世俗的な生命を失わなければならない（マタイ 10:37-39 参照）と、説明しています。人間の日常生活と、神の国に生きる生命との違いを強調するために、イエスは、私たちが十字架を担うことによって、一方から他方に移る、と言っているのです、つまり、生命が物質にあるとす

人間の感覚を犠牲にしなければならない、と言っているのだと、私は思っています。

イエスの剣は、自分の子供たちや親たちを、肉体の中にある肉体的な概念としてのみ認識している人には、耐え難いほど痛く苦しいものでしょう。愛する者たちを、あくまでも物質的な概念として考えるなら、物質を基盤とした関係では必ず起る離別は、耐え難いほど苦しいもの感じられます。しかし、お互いについての物質的な知識を捨て去ることが、人間関係における霊的意識の発見の源になることが、非常に多いのです。世俗的な願いが取り除かれるときに、霊的意識の平和、調和、そして喜びが、発見されるのです。

アブラハムの心の旅路については、文書としての記録は何も残されていないのですが、彼のこの3日間は、ヨナが魚のお腹の中で過ごした3日間、あるいはイエスが墓の中で過ごした3日間と似ていると考えられるでしょう。イエスが教えている通り、イエスのために命を失った者は、命を得るのです。聖書に出てくるこれらの例はすべて、生命を脅かすほど厳しい試練でした：アブラハムの剣は彼の手に握られており；ヨナは巨大な魚の腹の中に落ち、イエスは十字架上で処刑されました。しかし、肉体的な繋がりを犠牲にすることによって、生命と平和をもたらす**神**の計画が、3日のうちに成就されたのです。イサクは救われ、成長して、**神**の約束を成就するに至り；ヨナも救われ、二ネベの人々を救うことになり；そしてイエス自身は、完全な復活を経験することになるのです。

アブラハムは、イサクが**神**自身の子であり、つまり**神**の約束であるという考えを、完全に把握するためには、イサクがアブラハム自身の意志により、人間的な肉体を通して生まれてきたという、生々しい映像を捨てなければならなかったのかもしれませんが。また、イサクの体によって、彼の本体を、彼の身分を、認めることも捨て去らなければならなかったのかもしれませんが。彼は

また、息子の生命と知性が、彼の物質的な体の中にあると信じる誘惑と闘わなければならなかったのかもしれませんが。そして、それ以上に厳しい試練は、彼が、両方を求めていた、つまり、物質的生命と霊的生命という相反する特性の不可能な合体を、握りしめていたいと願っていたことだったのかもしれませんが。彼に心的に敵対するものが何であったにせよ、物質の中に生命が存在するというこれらの映像をすべて克服しなければ、真の霊的生存の意識が明白になることはないのです。

アブラハムの物語の中で、人の心を最も強く惹きつけるのは、アブラハムが自分の息子について、個人のものという物質的な見解を放棄することを学び、息子は神に約束された子であり、神の意志を成就するものであることを知ったということであったと、私は考えます。恐らく、アブラハムにとって、息子イサクは、肉体をもって生まれ、物質的な歴史をもち、死に至るという弱みを持ち、アブラハムに、または他の人間に、所有されている、という画像を、イサクの霊的な真実に、つまり神に愛された子であり、加護され、養育され、神の使命を果たすために準備されているという画像に、委ねなければならなかったのでしょう。聖書によると、アブラハムは、この霊的識別を垣間みていたのかもしれない、ということが幾度か暗示されています。

アブラハムが、召使いたちに少し離れたところで待っているように命じたとき、彼は「わたしとわらべは... あなたがたの所に帰ってきます」（創世 22:5）と言っています。彼がそのようになることを確かに知っていたかどうか分からないながら、彼はそのように話しているのです。彼はまた、イサクが何が起きているのか心配になって尋ねたとき、「神みずから燔祭の子羊を備えてくださるであろう」（創世 22:8）と、説明しています。ここにおいても、アブラハムは、神が行なうことを完全に把握していたかどうか分からないながら、彼は自分の意志を十字架に架け、

神の意志を目撃するために来ていることを認めています。

彼の個人的な苦闘がどんなものであったにせよ、重大なメッセージ、神は神の霊的所産を殺すことを命じていないというメッセージが、必要であったとき、彼はそれを受ける用意がありました。それどころか、神は、神の本来の約束が満たされることを、アブラハムに認識して欲しかったのだらうと、そして、神の豊かな恵みを、目撃して欲しかったのだらうと、推論することもできるでしょう。

この劇的瞬間に起こったことを、次のように要約できると思います（創世 22:10-18）：アブラハムはナイフを持って、自分の肉の願いを切り取ろうとしましたが、その瞬間に、神の使いの声がありました；「アブラハムよ、あなたはこの子を殺すために呼び出されたのではありません！これで、あなたは神を何にも増して崇めることができることを知ったので、あなたは神をその真の姿で理解しているのです。わたしの目的は、あなたに恵みをもたらし、わたしがあなたに託した約束を成就することです。何年も前に、わたしはあなたを「大いなる国民」の父としました；そして今、あなたは人間的な誤った願いを犠牲にしたので、あなたは物事を新しい目で見ることができるのです。わたしが、わたしの約束を永遠に守ることを、そしてわたしがあなたを愛し、あなたの子孫たちをも愛することを、あなたは理解することができるのです」。

イエスは、全人類が同様の剣によって祝福され得ることを教えていますが、その剣は、親たちや子供たちが、愛する者たちに、肉の中で必死にしがみついていることから、解放するためのものなのです。同情心、支配的であること、心配、自負心などは、すべて神の霊的な子に愛を注ぐよりも、物質を愛する傾向を現す現象なのです。物質への欲求を切り捨てる剣はまた、家族を死滅性の「苦しみ」から切り離す剣なのです。それは人々を、人間関係における利己主義から、

成熟した霊的な理解へと、目覚めさせます。そして、霊的な展望をもって、**神**の恵みと、すべての人への優しい愛を見ることができるのです。

アブラハムが、知恵の速やかな警告を聞いたように、人間関係の物質的な基礎を捨て去る人は、天使の導きを聞くことができるのです。彼らの剣の経験は、**神**の恒久的の平和、尊敬、喜び、そして愛の約束を、意識のなかに目覚めさせます。従順に、忠実に実行した、アブラハムの3日間の旅路は、**神**の約束が人生の中で満たされていることを発見する用意のある人すべての道程に、光を当ててくれます。

親も子も、兄弟も、姉妹も、アブラハムが苦しんだかもしれないように、人間関係において闘わなければならないことがあるかもしれません。しかし、アブラハムの勝利は、私たちの苦闘はまた、恐怖や悲しみから解放してくれるという希望を、もたらしてくれるのです。人間的苦闘から解放されて、私たちは、**神**が全人間家族の一人一人に与える恵みを、見いだす用意ができるのです。

シャーリー・ポールソンは、米国、イリノイ州、エバンストンのギャレット福音主義神学校でキリスト教史を学び、修士号を取得している。